

きんようぶんか  
**映華館**

**境分万純**

さこう ますみ・ジャーナリスト

ジ

ジャーナリスト出身の強みだろうか、タンヴィール・モカメル監督の作品には、直接にはパングラデシユが抱える問題を扱いながら、「時代や世界がそういう作品を必要としている」と感じさせるものが多い。

アジアフォーカス・福岡映画祭（二〇〇二年）で上映された「根のない樹」は、パングラデシユ文学の白眉「赤いシヤール」(シヨイヨド・ワリウツラー、

丹羽京子訳、大同生命国際文化基金)の映画化である。貧しい若者が流れついた村で偽りの聖職者として君臨するプロットを通じ、「宗教的狂信主義者の欺瞞を告発したかった」という監督が本作を撮ったのは〇一年。念頭に置いたのは、当時連立政権に入ったイスラーム原理主義政党や傘下団体だが、図らずも狂信主義が世界的に勢いづいた年でもあった。

そうした混迷が深まる〇四、

自国を描いて  
世界に通じる

**タンヴィール・モカメル監督**

●チッタゴン丘陵と平和協定実施を求める世界同時キャンペーン……バングラデシユ南東部のチッタゴン丘陵地帯(CHT)に住むジュマ(「焼き畑をする人」の意)と総称される先住民族は、政府による土地収奪と国軍の弾圧にさらされてきた。2009年、1997年に締結された平和協定実施を掲げる現政権が登場したことで、日本ほか4カ国のNGOが世界同時署名キャンペーンを展開中(1月31日まで)。問い合わせはジュマ・ネット 03-3831-1072 <http://www.jummanet.org/> 『コルフリの涙』のDVD(頒価1500円、送料別)もジュマ・ネットで購入できる。



年、やはり福岡で上映された「ラロン」。○五年にユネスコが世界無形遺産に指定したパウルの音楽の始祖で、一九世紀に活躍したラロン・フォキルをとり上げた。パウルの音楽とは元来、ラロンが拓いた宗派（パウルの）の哲学を伝える手段である。「その哲学は非常にユニークで、「神は人間の体内に宿る」、つまり人間を大切にすれば、それはそのまま神を大切にすることになる」というもの。ここから、信仰や民族の違いによって他者を弾圧するような、宗教や民族意識のアビュース（濫用）を批判しようとした。

バンクラデシユ映画界の筆頭監督として、国家映画賞などおびただしい受賞歴をもつ監督だが、上映禁止措置に遭うことも少なくない。一例がドキュメンタリー「コロノフリの涙」（○五年）だ。チャッタゴン丘陵地帯（CHT）の少数民族（先住民族）の状況を描いた貴重な記録である（作品画像と欄外参照）。きっかけはドイツの作家キユンター・グラス。「ダッカ大学での講演後、CHTの先住民族虐殺に触れたグラスに、だれかが「やつらは分離主義者だ」と返した。グラスは激怒し「東パキスタン（現バンクラデシユ）の独立運動に対して、西パキスタンも同じことを言っていた」。私はとても恥ずかしいと思い、CH

Tを撮ろうと決意したのです」。監督はよく「一輪の花では花崗はつくれない」というラロンの歌を引く。「あらゆる少数民族を平等に包含して初めて、美しい国ができると思うんですね」。

また、「声を上げようにも上げられない者たちに代わって伝えるのが社会派映画監督の責任」とも。それを全面展開したドキュメンタリー「Postrobalkara: Garment Girls of Bangladesh」（「衣料品産業で働く女性たち」○七年）は特筆ものだ。



「コロノフリの涙」より

バンクラデシユの衣料品産業はいまや、輸出所得の七六％を占める最大の輸出産業である。直接雇用だけで二〇〇万人、その八五％が主として地方出身の若い女性だ。彼女たちに自力で収入を得る道が開けた意義は大きかったが、この一五年近く、労働条件は改善されていない。基本就業時間は午前八時から午後一〇時だが、残業で深夜の三時、四時になることもままある。それでいながら給与は月に三〇米ドル前後。

「外貨の稼ぎ手として国を支えながら、劣悪な労働環境に置かれたままの女性たち。彼女たちへの敬意とともに、産業が内包する問題構造をあぶり出したかった」と語る監督は、「北」のバイヤーによるコスト減圧力と納期圧縮、工場法や労働法違反、最低賃金引き上げを求める労働組合、追いつめられた労働者による工場襲撃事件の多発、政府や経営者団体の責任などを描きだしていく。そして、代替手段のひとつに示すのがフェアトレード（公正貿易）だ。

折しも、ユニクロを展開するファーストリテイリングが中国からバンクラデシユへと生産拠点を移し始めた。監督が突きつける問題は、日本の私たちにもこれからますます身近になる。